

主語 wh 疑問文の派生再考

末永 広大

1. はじめに

主語 wh 疑問文の統語派生に関しては二つの対立する分析が存在する。一つは空移動仮説(Vacuuous Movement Hypothesis: VMH)に基づく分析であり、目的語と付加詞の wh 句が CP 指定部に移動するのに対して、主語 wh 句は TP 指定部に留まると想定される。もう一つは、主語 wh 句が CP 指定部に移動するという想定である。Chomsky (2013, 2015)におけるラベル理論の想定に従うと、英語の T は弱く、そのラベル付けには T と顕在的な主語との間の一致が必要なので、主語 wh 句は CP 指定部には移動出来ないことになり、VMH 分析が支持される。しかし、多くの先行研究で、VMH 分析には経験的な問題があることが指摘されてきた。その一方で、主語 wh 句が CP 指定部に移動する場合にも、深刻な問題が生じる。本論では、これらの問題を克服しつつ、主語 wh 句が CP 指定部に移動可能であると主張する。もっと言えば、英語における主語 wh 疑問文の派生では、Internal pair-Merge による T-to-C raising が行われると主張する。

2. 問題提起

本節では、VMH の経験的問題と、Chomsky (2015) における T のラベル付けに関する理論的問題を概観する。

まず、以下における間接疑問縮約(TP 削除)が示すように、Who が TP 内に留まる場合は、Who 自体にも省略が適用されるはずである。一方で、Who が CP 指定部へ移動すると想定すれば、(1)の文法性が説明できる。

- (1) A: Someone solved the problem.
B: Who? (Merchant (2008))
- (2) a. [CP C [TP who T [vP solved the problem]]]?
b. [CP who C [TP t_{who} T [vP solved the problem]]]?

次に、以下におけるスコープ対比が示すように、Who が Someone と同様に TP 内に留まるとすれば、everyone が Who よりも広いスコープをとる解釈が可能はずだが、不可能である(Mizuguchi (2014), Bošković (2019))。

- (3) a. Who loves everyone? (who > everyone; *everyone > who)
b. Someone loves everyone. (someone > everyone; everyone > someone)

最後に、ECM 構文に対する Chomsky (2015)の想定は、T が弱いという想定と矛盾している。英語の T が弱いとすれば、非定形節である α のラベルは決まらず、派生は破綻するはずである。

- (4) a. Who do you expect to win?
b. [_γ v* [_β who expect [_α who to win]]]. $\alpha = ?$, $\beta = \langle \varphi, \varphi \rangle$

3. SPEC-CP 移動の問題

本節では、主語 wh 句が CP 指定部へ移動する場合の問題点を概観していく。

Hayashi (2020)は、Epstein, Kitahara and Seely (EKS) (2017) の分析を発展させ、全ての主要部は普遍的に強く、素性継承が随意的に行われると主張した上で、英語の主語が CP 指定部に移動出来ない理由を説明している。

以下に示すように、Hayashi の分析に基づく、主語が CP 指定部に移動する場合、C は[u φ]素性を保持することが可能なので、Minimal Search によって付与された $\langle \varphi, \varphi \rangle$ ラベルに基づいて、インターフェースで当該の素性の valuation が可能となる。

- (5) [_ε Subject_[φ] [_δ C_[v φ] [_γ T [_β Subject_[φ] [_α R-v* ...]]]]] $\alpha = \beta = R-v^*$, $\gamma = T$, $\delta = C$, $\epsilon = \langle \varphi, \varphi \rangle$

しかし、上記のような場合では接辞移動の問題が生じると Hayashi は主張する。というのも、C における[v φ]は運動感覚インターフェースで動詞 V (R-v*)に付着する必要があるが、C と V の間には T 主要部が介在しており、接辞移動に必要な局所性を満たすことが出来ず、[v φ]の V への付着が不可能となる(*T \Rightarrow Neg \Rightarrow V)。このことから、英語では主語が CP 指定部には移動できないことになる。

もう一つの問題は主格付与である。EKS (2012)の分析に基づく、英語における主格付与は、T と顕在的な主語要素との間の[φ]素性の一致と、T が内在的に有する Tense 素性の組み合わせによって行われる。しかし、主語 wh 句が TP 指定部を経由せずに CP 指定部へ移動することが多くの言語で実証・観察されている(Messick (2020))。その場合、主語 wh 句と C との間の[φ]素性の一致が可能だとしても、EKS に従うと C は内在的に[Tense]素性を持たないため、主語 wh 句に主格を付与することが不可能となる。

4. 提案

本節では、EKS (2012, 2017) 及び Hayashi (2020) の分析に従いつつ、以下に示すように、英語における主語 wh 疑問文では Internal pair-Merge による T-to-C raising が行われると想定し、これによって接辞移動に課される局所条件を満たし、さらに主格付与を可能にしながら、主語 wh 句が CP 指定部に移動可能であると主張する。

$$(6) \quad T \text{ to } C \text{ raising} : [_{CP} \text{ Who } [_{C} \text{ T-C}_{[v\phi]} [_{TP} \text{ T } [_{R-v^*} \text{ V...}]]]]$$

本論では、省略とコピー削除は共に同一の削除操作によって行われる、という Landau (2020: 304-307)の主張に従い、英語では省略が接辞移動に先行するという経験的事実から、以下に示すように、運動感覚インターフェイスにおいて主要部移動を受けた T コピーの削除が接辞移動に先行することで、C と V の隣接性が構築されると想定する。これにより [vφ]の V への付着が可能になるだけでなく、T が C に移動することで CP 指定部における <φ, φ>ラベルと [Tense]素性に基づいて主語 wh 句に主格が与えられる。

$$(7) \quad \text{Affix Hopping} : [_{CP} \text{ Who } [_{C} \text{ T-C}_{[v\phi]} [_{TP} \text{ } < \text{T} > [_{R-v^*} \text{ V...}]]]] \quad (\text{CP} = \langle \text{Q}, \text{Q} \rangle, \langle \phi, \phi \rangle)$$

5. that-trace 効果への拡張

本節では本論の分析を、これまでは ECP や EPP などのテクニカルな概念や想定に基づく説明がなされてきた that 痕跡効果(= (8))に拡張し、本論ではそのような概念に頼らずに、接辞移動と主格付与の可否からこの効果が導出されることを示す。

$$(8) \quad \text{Who do you think } (*\text{that}) \text{ fixed the car?}$$

英語では、仮定法倒置などで、主要部位置が顕在的な要素(if など)で満たされている場合は、当該の位置への主要部移動が不可能であるという経験的事実から、従属節の C 主要部位置が顕在的な that によって占められている場合、T-to-C raising が適用出来ないことになり、感覚運動インターフェイスにおける接辞移動と主格付与が不可能となる。その一方で、当該の主要部位置が顕在的な要素によって占められていない場合、T-to-C raising が可能となり、接辞移動と主格付与が可能となる。よって本分析は、ECP や EPP、weak T などに頼らずとも、that 痕跡効果を導出できる。

6. that 痕跡効果の有無

本節では Goto (2017)と Hayashi (2021)の提案に従い、以下に示す that 痕跡効果が観察されないイタリア語への考察を行う。

$$(9) \quad \begin{array}{llll} \text{chi} & \text{pensi} & [\text{che} & \text{verrà}]? \\ \text{who} & \text{do-you-think} & [\text{that} & \text{will come}] \end{array}$$

$$(10) \quad \begin{array}{l} \text{a. R-v}^* [\phi] \\ \text{b. R-v}^* [\phi]\text{-T } [u\phi] \end{array}$$

Hayashi (2021)は Goto (2017)の主張を援用し、イタリア語の V (R-v*)は φ 素性を持ち、φ 素性を持つ V が uφ を持つ T に主要部移動することで、インターフェイスにおいて T が適切な解釈を得ると主張している。これに従うと、上記の(9)の派生において R-v* to T raising が行われることで、R-v*-T アマルガムにおける uφ の valuation が可能だとすれば接辞移動が可能となるため、che(that)が生起していても派生が収束することを予測する。

7. 結語

本論では、英語における主語 wh 疑問文の派生では、Internal pair-Merge による T-to-C raising が行われると主張し、対立する二つの分析における問題点を克服した上で、主語 wh 句が CP 指定部へ移動可能であることを示し、that 痕跡効果にも拡張できることを示した。本論の想定をより頑強なものにするためには、他の関連する構文への拡張など、更なる調査が必要だが、その詳細な議論については紙幅の関係上割愛する。

主要参考文献

- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simon Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
- Epstein, Samuel D., Hisatsugu Kitahara and T. Daniel Seely (2012) “Structure Building That Can’t Be!” *Ways of Structure Building*, ed. by Myriam Uribe-Etxebarria and Vidal Valmala, 253-270, Oxford University Press, Oxford.
- Hayashi, Norimasa (2020) “Labeling without Weak Heads,” *Syntax* 23, 275-294.